

さて、どんな訓練なのか？

静岡県で過去14回（14年間）に渡って行われてきた
訓練のエッセンスを紹介

南海トラフの想定震源域



静岡県内外の災害ボランティアによる救援活動 のための図上訓練

・東海地震に備えた全県レベルでの「作戦会議」

東海地震が起きたときの被害を全体で確認（事前課題でも被害想定読み込み）

災害フェーズ、ボランティアセンターの開設イメージなどを地区別のグループテーブルごとに1日半の日程で話し合っていく

大地図、模造紙、付箋紙、被害想定等を使ってセッションを複数進行

その場にいる参加者は本番のことを自分ごととして考える

「訓練」というより「打ち合わせ」「作戦会議」と言った方がふさわしい

ある回のときのテーマは「受援力（じゅえんりょく）」

1. 静岡県内のボランティアがいかに自助の力を発揮し外部から救援が来るまで持ちこたえられるか
2. 静岡県外のボランティアがいかに被災地に負担をかけずに効率よく支援に入れるか

《初日》

第1セッション：東海地震での静岡県内の市町はどのような被害を受けるのか

第2セッション：時間の経過に伴い被災者が求めるもの（ボランティアニーズ）はどう変化するか

第3セッション：「支援を求めている人々」とはどういう人々？

《2日目》

第4セッション：“最初の1ヶ月”必要とされるのは、どんなボランティア？

第5セッション：“最初の1ヶ月”必要とされるボランティアの確保の目途はつくか？

県外参加者（県外プレイヤー）の作戦会議

東海地震は静岡県全域とその周辺県の一部を被害範囲とする大規模地震

具体的な救援・支援を考えたとき、救援リソースは東京・神奈川方面から入る「東日本」、名古屋方面から入る「西日本」、山梨方面から入る「北日本」の3つに分けられる。

県外参加者のグループは主に「西日本」「東日本」「北日本」に分かれて、どういうルートで静岡にいつ頃入れるのか？を具体的に考える「作戦会議」を行った

ある回のおときは支援側と受け入れ側の「つながり」を考える

訓練の目的、県内の連携支援体制などを全員で共有した上で、最も規模が大きいと言われる南海トラフ巨大地震によって県内の複数市町が被災した場合を想定

初日：「避難所支援」

2日目：「在宅避難者支援」を主要テーマに30を超すグループに分かれて検討

東日本大震災、熊本地震、九州北部豪雨、関東東北豪雨などでの避難所支援・在宅支援の事例報告を聞いた上で、

- 発災1カ月後の被災者や地域の困りごとをイメージ
- 解決に向けどんな支援の取り組みができるか
- 誰とどのように連携すればアプローチできるか
- 平時に何をしなければいけないか

グループごとに
話し合い共有した



ワークショップ「避難所支援」の様子



情報共有会議の訓練風景

ある回のおときは支援側と受け入れ側の「つながり」を考える

静岡県災害ボランティア本部・情報センターの中に設置する「市町（村）支援チーム」が、プログラムの内容に沿い、各市町のサポートや個別調整、災害対策本部（行政）とのつながりや市町間・広域連携など課題解決に向けた支援を行った。

2日目には市町支援チームが各グループを回って収集した情報をもとに、県災害ボランティア本部、県域の関係団体などによる「県域」の情報共有会議（模擬訓練）を開催した。

決まったことを体にたたき込むタイプの訓練ではない。

エリアに固有の課題を見つけ、その課題に気付くこと、これが目的

ある回では災害時の自分のまちの支援体制

■ワーク「災害時の自分のまちの支援体制を考える」

各市町が災害ボランティアセンター(V C)を立ち上げたという想定のもと、

「ガレキ撤去、清掃」

「避難所」

「要支援者」

の3課題についてV Cごとに「自己完結できること」「本部に要請すること」を検討し要請事項をタブレットPCを使用して県本部に発信。

県本部ではV Cからの情報を把握し、市町支援チームスタッフを通じ対応(回答)を連絡

■情報共有会議

県本部で開催される「情報共有会議」を模擬開催し、参加者全員でワークショップで得た情報の共有状況を確認した

今年の2月は「多様性」について考える

2月23日(土)、24日(日)の2日間、常葉大学草薙キャンパスで300人ほどが参加
『今やりたい！災害時の「多様」に気づき、地域の備えに+α』

以前はボランティア活動と言えば、泥だし、家の周囲の片付け、炊き出しだった

■災害時、避難所には様々な人が避難してくる

■災害時にどんな**多様性**があるのか？

「高齢者」「外国人」「障がい者」「妊婦」「乳幼児」「アレルギーを持つ子」

「ペットを飼っているひと」

■避難所に来れないひともある

引きこもりの子供（おとな）

インフルエンザの患者

みんなが「多様」を知っておかないと、外れてしまった人は取り残されてしまう。
誰もが取りこぼされない社会にするために、何ができるかを考えるワーク

3.11の際の多様な「支援」

洗濯代行ボランティア@仙台
非難女性の洗濯物を女性ボラ
ンティアが洗濯

被災地には行けないけど「何
とかしたい」女性：ボラン
ティア登録287名

仙台市男女共同参画推進セン
ター「エル・ソーラ仙台」
の報告

洗濯代行ボランティア

女性と 笑顔まぢづくり

■ 避難女性の洗濯物を女性ボランティアが洗濯

- ▶ 被災地には行けないけれど「何かしたい！」女性
- ▶ 洗濯ボランティア登録女性のべ287名、
- ▶ 洗濯物は520件
(提供団体：イコールネット仙台ほか)

被災地 ← ボランティア ← 女性ボランティア

■ 新たなニーズを発見し支援につなげる

- ▶ プラ・サニタリーを届けよう！

いつも事前にやっていること

- 静岡県の被害想定を「支援に入るエリア」を想定して事前に読み込んでくること

地震規模、死者、負傷者、
家屋被害、避難所数

リアリティー
HUG,DIGのようなゲームではない

- 自分の団体が、どんな活動をしている、強味は何か？を記載して提出

参加団体が多様なリソース一覧になる

⇒防災の団体に限らない：子育て支援、通訳ボラ、教育、傾聴、読み聞かせ、

ひととひととの関係性

災害が起きてから“はじめまして”で支援を始めるのと、既に知った人がいて、協力関係のある地域で、災害支援をスタートするのとでは、
支援開始までのスピードが全く違ってくる。

人材づくり、人脈づくりは非常に重要だ。この訓練はその点でも重要